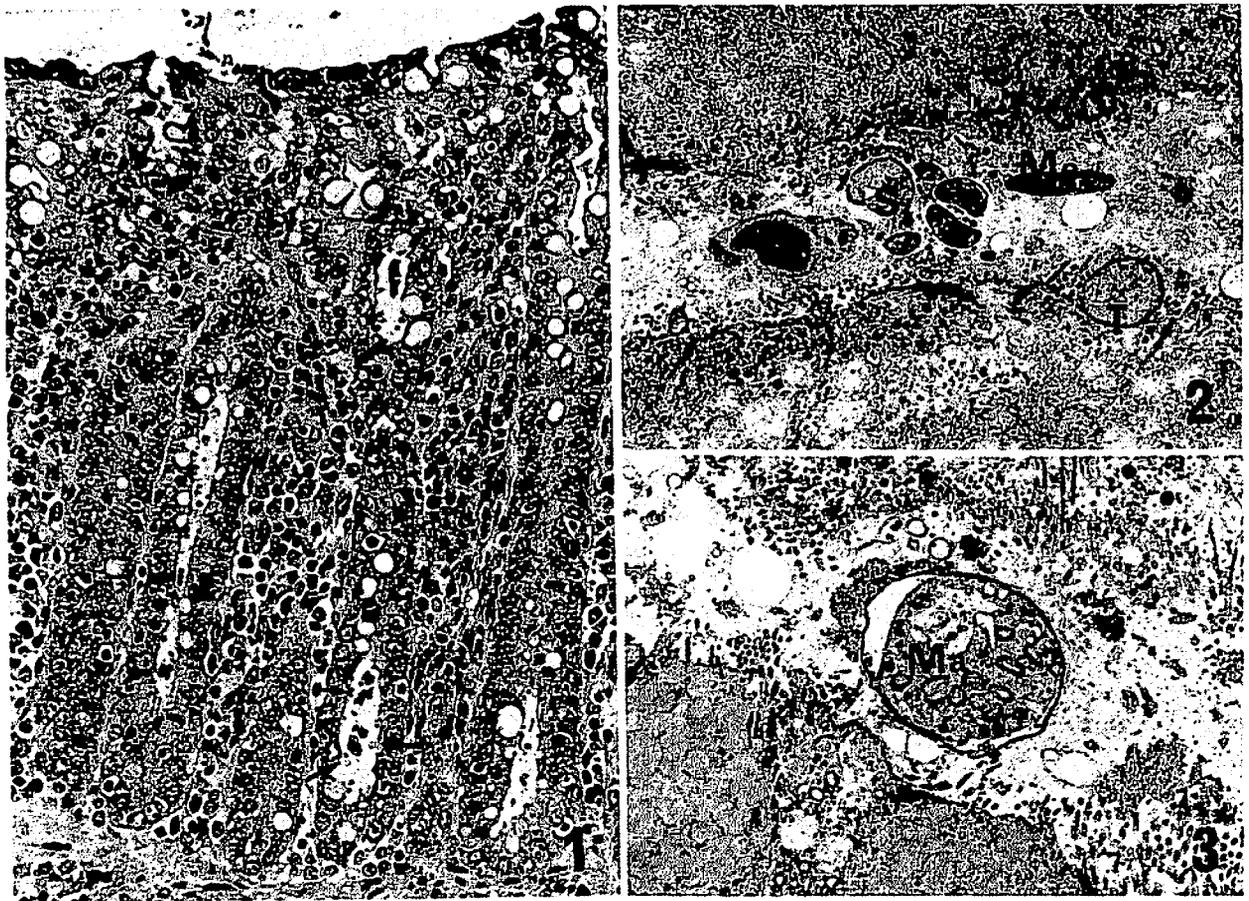


# 仔豚の結腸

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第23回獣医病理学研修会標本No.416



動物：豚（ランドレース種），雄，34日齢。

臨床：1983年9月，離乳直後の仔豚を購入し，当研究室で抗生物質中毒症研究の目的で，26日齢から8日間市販飼料とチアムリン500ppm溶解水道水を自由に摂取させた後，殺処分した症例である。実験期間中，軽度の発育遅延が認められた以外，異常は観察されなかった。

剖検所見：結腸を含めとくに異常は認められなかった。

組織所見：特徴所見として，粘膜上皮細胞の自由表面に原虫cryptosporidium (Cr) の寄生があった。Crは小型（径1～2 $\mu$ ）でヘマトキシリンに濃染するものから，大型（径3～4 $\mu$ ）でヘマトキシリンに淡染するものまであり，時折，メロゾイトを含むシizontもあった（写真1；H・E，細矢印は小型Crを太矢印は大型Crを示す， $\times 270$ ）。PAS染色標本では，小型Crは陰性，大型Crは陽性を示し，PAS-アルシアン背重染色標本では，粘液物質が青染するため，Crはより明瞭に識別できた。Crが寄生した陰窩は拡張し，内腔には剝離上皮，粘液性物質，好中球の遊出が見られた。粘膜固有層には，組織球，リンパ球，形質細胞，好中球が軽度に浸潤していた。

電顕所見：ホルマリン固定組織から作製した電顕標本

では，宿主細胞の自由表面に形成されたparasitophorous membrane内に，Crの各種発育段階が認められた（写真2；Tはトロフォゾイト，Sはシizont，Meはシizontから放出されたメロゾイトを示す。 $\times 3,500$ ，写真3；Maはマクロガメトサイトを示す。 $\times 6,000$ ）。

近年，世界各地で広い宿主域を示したCr寄生報告が相次ぎ，その生活史，病原性についての研究が活発である。また，本感染症は人畜共通原虫病と見なされつつある。豚のCr自然感染例は，1977年米国，1982年オーストラリア，西ドイツで確認されているにすぎない。今回の症例は，Cr感染鶏を飼育していた場所に近接して飼育された。したがって，鶏由来のCr感染の可能性が高い。前記のように，Cr感染は世界各地で各種動物に認められつつあるが，わが国では，極めて限られた発生にとどまっている。Crの同定は，組織標本，さらには電顕標本でなされるのが最もよい。よってここに，見本標本配布を目的として出題した。

診断：cryptosporidium寄生を伴う急性カタル性結腸炎。